暮らしのぞき箱

季節を知ったら暮らしが楽しくなった

～第二三一号～

大暑　七月二十二日

かみなりや

夏の風物、夕立に雷。ざっと降る雨にひとときの涼は得られますが、雷は怖いもの。それは江戸の昔も同じだったようです。

夕立や伊勢の壺屋の煙草入れ

古なる光る強い紙なり（降る鳴る光る強い雷）

壺屋の煙草入れとは、革に似せた和紙製のもので、「擬革紙」と呼ばれ、お伊勢参りの土産として人気を博しました。紙製ながら堅牢である品質を、雷にかけた川柳。この「かみなり」を店名にした革工藝の店が内宮前の宇治浦田町に開店しました。店内には擬革紙をはじめ、全国の革職人六十人が作った財布や名刺入れ、鞄など革製品千点ほどがずらりと並びます。

革工藝の店は構想から二年、スタッフが新潟県から奄美大島まで全国の革職人を訪ねて、製品を揃えました。それだけに目新しいものが多く、牛、仔牛、鹿、豚、山羊…そして鮫も。鮫は伊勢神宮の神饌に使われることから、伊勢では「さめのたれ」が郷土食として親しまれてはいますが、鮫革の財布は初めて見ました。

皮革は古くから人々の生活の中で使われてきた素材です。動物の体を包んでいた皮は剥がすとすぐに乾燥して硬くなりますが、腐らないようにして柔らかく加工する（なめす）と、長く使える「革」になるのです。

「革製品は常に手に触れるものが多く、使い手によって育ち方が変わってきます。長く使い込んでもらい、愛着をもってほしいですね」とスタッフ。また、革職人たちが自分の個性とともに、実用性を重視する姿勢にも信頼ができたと言います。使えば使うほどにじみ出る革製品の〝味〟は、実用性を兼ねたものであってこそ。日本にも革の文化が根づいていることを改めて感じました。

文　千種清美

伊勢内宮前 おかげ横丁